

SHANTI



2025.6
Vol. 321
シャンティ

特 集

日本国内の 外国人支援の現場から



巻
末
言

道



被災地と共に

埼玉県 光秀寺 住職
りゅう き
関根 隆 紀

2024年の元日、最大震度7の激しい揺れが能登半島を襲いました。3年前に完全復興を宣言したばかりの輪島市門前町は再び大きな困難に直面しました。

17年前の2007年能登半島地震では、門前町の揺れは特に激しく、總持寺祖院も僧堂が全壊するなど甚大な被害を受けました。当時、私は曹洞宗宗務庁の災害援護を所管する部署で被災地の支援に携わっていました。曹洞宗青年会はお茶を振る舞い被災された方々の声に耳を傾ける行茶活動を、宗門関係団体、有志の僧侶や寺族は炊き出しや家屋の片付けなどを行いました。そして、これらの活動が円滑に進められるよう行政や他団体との関係を調整してくれたのがシャンティ国際ボランティア会でした。

昨年の地震発生直後、シャンティは輪島市からの要請を受け、門前町の「禅の里交流館」を拠点として、避難所の運営、炊き出し、配食、サロン活動、入浴支援、県外から訪れるボランティアの調整など、多岐にわたる活動を展開してきました。私も2月から被災地に入り、シャンティの活動に参加することができました。シャンティの職員は、親身に被災者に向きあい、さま



能登半島地震の支援現場にて

ざまな困難な問題に取り組み、休む間もなく活動を続け、被災地の人々から厚い信頼を得ることとなりました。それは、シャンティの思い「共に生き、共に学ぶ」の実践そのものであったように感じます。

シャンティの前身は僧侶が立ち上げた、曹洞宗ボランティア会です。曹洞宗では菩薩行の実践として「同事」の教えがあります。自分と他人とを隔てることなく、常に相手の立場に立って、共に喜び、共に悲しみ、共に生きていくこと。これがNGOの理念として脈々と引き継がれていると感じました。

今、能登では、被災された若い人たちが能登の復興に向けて新たな取り組みを行っています。能登を忘れることなく、被災地の人々と共に、1日も早い復興に貢献できるよう願っています。



SHANTI vol.321 CONTENTS

としまる多文化フェスで着物を着る体験を楽しむ参加者 (2025年撮影) 協力: 着物大すぎプロジェクト

- 4 追悼
役員八木澤 克昌氏 ご逝去のお知らせ
- 6 特集
日本国内の外国人支援の現場から
- 12 世界の絵本を読んでみよう
『ウサギとスズメ』
アフガニスタン 2009年
- 14 世界の麺 カンボジアの麺「ミーカターン」
- 15 世界の現場からAIRMAIL
▶ラオス事務所 ▶ネパール事務所 ▶ミャンマー事務所
- 22 役員改選
- 24 ウクライナ危機事業報告

- 26 開催報告
ミャンマー事務所10周年イベント
「学びを届けるための挑戦〜NGOの苦悩と模索の10年」
- 28 つくり手さんのぬくもり
タイ生産者団体
House of Hope (希望の家)
- 29 絵本に込められた想い
『きょうせんそうがはじまると』
- 30 ファインダーをのぞいて
「アフガニスタン再訪」
- 31 お知らせ
- 32 道 被災地と共に
埼玉県 光秀寺 住職
関根 隆紀

日本に在留する外国人の数は近年増え続け、3年連続で過去最高となりました。岐路に立つ日本社会において、外国人を受け入れるための体制の確立は急務です。日本で暮らす外国人の困りごとは就労、教育、言語、住居、在留資格、医療など多岐にわたります。シャンティは誰もが安心して暮らせる社会を目指して、2020年に外国ルーツの子どもの居場所づくり事業を、2021年には生活が困窮する外国人への包括支援として、社会福祉協議会、弁護士、外国人支援コーディネーターと共に、新たな事業を開始しました。今号ではこれまでの5年を共に歩んできた方々と振り返りたいと思います。



今号の表紙

としまる多文化フェスの会場にて
(2025年撮影)
『たまごのあかちゃん』
『きんぎょか』にげた』福音館書店



役員 八木澤 克昌氏 ご逝去

弊会役員の八木澤 克昌氏は、令和7年1月7日に享年66歳で逝去いたしました。

故人に賜りました生前のご厚意に謹んで御礼申し上げます。

八木澤氏はシャンティの創成期を牽引し、

現在につながるシャンティの礎を築きあげました。

30年以上タイのスラムを拠点にアジア地域での活動に携わりました。

ここでご葬儀、お別れ会の様子をご報告します。

八木澤 克昌プロフィール（略歴）

1958年1月9日	栃木県矢板市生まれ	2004年	ラオス事務所長に就任、シャンティ国際ボランティア会理事に就任
1980年3月	東北福祉大学 社会福祉学部卒業	2006年	カンボジア事務所長に就任
7月	「曹洞宗東南アジア難民救済会議」(JSRC) タイ・バンコク事務所にボランティアとして赴任	2009年	アジア地域ディレクターに就任
1985年	アメリカ・バーモント州の SIT（国際研修大学）大学院で異文化間マネジメント修士コースに学ぶ		シャンティ国際ボランティア会 常務理事に就任
1992年	曹洞宗ボランティア会（SVA）事務局長代行に就任	2014年	アジア地域ディレクター 兼 ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所長に就任
1996年	SVA タイ事務所長に就任	2018年	アジア地域ディレクターに就任
2001年	バンコク・アジア地域事務所長 兼 シーカー・アジア財団事務局長に就任	2023年	理事に就任
		2025年	1月7日逝去 享年 66 歳

【タイでのご葬儀の報告】

八木澤氏の葬儀はタイ国内でタイ式にて執り行われました。

2025年1月8日から10日の3日間、バンコクのクロントイ区サバーン寺院にて、18時半から読経が行われました。

11日は読経、法話の後、境内の火葬場で荼毘に付されました。

生前八木澤氏がお世話になった、日本大使館、JICA、タイに駐在されている方々、友人知人、親交が厚かった現地メディア関係者の方々、そして弊会の役員、東京事務所職員、タイ・カンボジア・ラオス・ミャンマー・ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所職員、元職員、シーカー・アジア財団の職員、関係者など1000名を超える方々がご参集くださり、多くの方の献花に囲まれ、共にお送りいただきました。ご遺骨は本人の遺志により、ご家族の手でメコン川に散骨、またスリン県バンサイ村にも納骨されました。

【お別れ会の報告】

2025年2月28日、東京グランドホテルにてシャンティ主催のお別れ会を開催しました。若林会長からのあいさつに始まり、生前親しかった8名の方から追悼の言葉をいただきました。（お言葉をいただいたみなさま…元カンボジア日本国大使館特命全権大使・篠原勝弘様、前在タイ日本国大使館次席公使 現 JICA 理事・大場雄一様、「茨城アジア教育基金」を支える会元会長・長谷川典子様、日本労働組合総連合会元会長・神津里季生様、日本国際ボランティアセンター（JVC）代表理事・熊岡路次様、東京ジャイアンツタウン・マネジメントカンパニー社長・長谷川聖治様、元同僚・SVA京都寺院の会・成田大航様、大東文化大学・齋藤百合子様）

お連れ合い様からのお礼の手紙の代読、ご息からのあいさつに続き、最後は秦副会長の謝辞で締めくくりました。会場には、八木澤氏の友人、知人、元同僚、後輩、NGO関係者、メディア関係者、弊会役員・職員など、200名を超える方々にご参加いただきました。



ご視聴は
こちらから



お別れ会と
八木澤氏の追悼映像は
こちらからご覧いただけます

包括支援事業「としまる」の開始

2021

居場所づくりを通して、地域の外国人住民のさまざまな課題を知り、そして想いを持った地域のたくさんの方に出会いました。2021年5月、コロナ禍の緊急支援として始まった包括支援事業「TOSHIMA Multicultural Support“としまる”」は、豊島区において現在も続いています。

調査と計画

2019

シャンティのこれまでの学びを生かし、できることは何か。そう考え、外国ルーツの方々への支援の計画が始まりました。国内では新たな挑戦であり、ときには現場に足を運んでさまざまな方からお話を伺いながら、外国ルーツの方々の課題を掘り下げていきました。

5年間のあゆみ

練馬区での展開

豊島区での活動を続けていく中で、周辺地域に住む外国人の皆さんも、その支援を求めて「としまる」に来られるようになりました。そこで豊島区での経験を生かし、2024年3月に隣の練馬区で同様の活動「ねりんく」を始めました。支援の輪は広がっています。

2024

外国ルーツの子どもたちの居場所づくり

多くの外国ルーツの方々に住む東京都豊島区において、豊島子どもWAKUWAKUネットワークと協働し、2020年5月に外国ルーツの子どもたちの居場所づくり活動を始めました。コロナ禍と重なり、「オンライン居場所」として活動を続けました。

2020

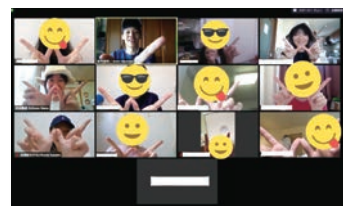


特集



成果

2020年から2023年にかけて、「居場所づくり」活動を154回行いました。地域に暮らす外国ルーツの子どもたち、のべ1,067人が、「オンライン居場所」でのレクリエーションなどに参加しました。参加した子どもは「学校では静かだけど、ここだとおしゃべりと言われ」と笑顔で語っていました。



外国ルーツの子どもたちの居場所づくり

2020年5月に、外国ルーツの子どもたちの居場所づくり事業を開始しました。外国ルーツの子どもたちは、社会からの孤立や孤独感、将来像を描くことの難しさなど特有の困難を抱えています。こうした困難を乗り越えていくことができるように、同年代の外国ルーツの参加者や先輩たち、支援者とのつながりの中で、自分自身や社会について考える機会が得られる居場所の提供を目的としました。コロナ禍と重なり、主にオンラインでの活動になりました。

「これまで誰にも悩みを打ち明けられなかった。話を聞いてくれたことがうれしかった」ある日、政情不安が続くミャンマーから日本にきたという女性が、涙ながらに語りました。異国の地で孤独の中、歯を食いしばって毎日を送っている人たちがいます。

シャンティが2020年から取り組む、日本国内における外国人支援の活動。これまで多くの人に出会い、多くの声を聞き、共に考えてきました。支援の現場で見える景色、聞こえる声は、どのようなものなのでしょう。多様化が進むこの国で新たな支援のかたちを探し続けた、シャンティの5年間のあゆみをご紹介します。

「これまで誰にも悩みを打ち明けられなかった。話を聞いてくれたことがうれしかった」ある日、政情不安が続くミャンマーから日本にきたという女性が、涙ながらに語りました。異国の地で孤独の中、歯を食いしばって毎日を送っている人たちがいます。

シャンティが2020年から取り組む、日本国内における外国人支援の活動。これまで多くの人に出会い、多くの声を聞き、共に考えてきました。支援の現場で見える景色、聞こえる声は、どのようなものなのでしょう。多様化が進むこの国で新たな支援のかたちを探し続けた、シャンティの5年間のあゆみをご紹介します。

日本国内の外国人支援の現場から

いつものお店で、街角で、見かける外国から来た人々。年を追うごとに、彼らと出会う機会は多くなっているのではないのでしょうか。日本に暮らす外国人住民は、その数37万8977人（2024年・出入国在留管理庁）。旅行客はもちろん、日本での暮らしを始める外国人も増え続けています。

そんな彼らは今や、至るところで社会を支えている一方、日本社会が彼らを迎え入れる準備は、十分にできているとは言えません。

多くの国で活動続けるシャンティですが、日本もそのひとつです。海の向こうで積み重ねた学びを、これからの日本で生かしていくことができないか。「共に生き、共に学ぶ」ことができる共生社会を目指し、シャンティは新たな挑戦を始めました。

「これまで誰にも悩みを打ち明けられなかった。話を聞いてくれたことがうれしかった」ある日、政情不安が続くミャンマーから日本にきたという女性が、涙ながらに語りました。異国の地で孤独の中、歯を食いしばって毎日を送っている人たちがいます。

シャンティが2020年から取り組む、日本国内における外国人支援の活動。これまで多くの人に出会い、多くの声を聞き、共に考えてきました。支援の現場で見える景色、聞こえる声は、どのようなものなのでしょう。多様化が進むこの国で新たな支援のかたちを探し続けた、シャンティの5年間のあゆみをご紹介します。



活動の流れ

1 アウトリーチ

支援を行うには、外国ルーツの方々となが、課題を知ることが欠かせません。そこで、社会福祉協議会を通して「特例貸付」の申請者に対して直接案内をお送りしています。活動を続けていくことで、外国人コミュニティのつながりも広がっています。

2 支援の実施



としまる相談窓口

月1回の相談会には来られない、相談しきれないという声から、相談アクセスの向上を目指し、月3回の「相談窓口」活動も行っています。豊島区役所や公共施設を会場に、これまで57回開催し、のべ234名が来場しました。

テーマ型セミナー・相談会

多くの相談が寄せられる課題に関しては、テーマ型のセミナー・相談会を行っています。これまで在留資格や住まいなどをテーマに開催し、弁護士やコーディネーターによる多言語でのレクチャーに、皆さん熱心に耳を傾けていました。

フードパントリー・相談会

毎月開催し、生活にお困りの方に食料を配布するとともに、弁護士・ソーシャルワーカーなどによる生活・法律相談を行います。これまで、東京都豊島区で48回1,483名、練馬区で4回100名が来場しました。



相談者Aさん

困難なことはたくさんありますが、いつも皆さんが心から寄り添ってくれています。「としまる」のサポートで、自立した生活に近づいていると感じます。日本語が十分に話せませんが、正しい情報も得られます。やっぱり、困ったときに相談相手がいるのは心強いですね。



相談会をきっかけに活動が広がっています。豊島区では「外国人の方が、得意なことをもって生かせる場をつくりたい」という想いから有志が集まり、3月9日に「としまる多文化フェスティバル」を開催しました。「こんなに料理が上手だったの!？」と、相談の場とは異なる一面に、みんな気づけました。練馬区では外国人住民と日本人が交流できる場として「やさしい日本語講座」を開催しました。「やさしい」は「易しい」だけではなく、「優しい」でもあります。日本人と外国人が優しくつながりが持てる場を目指します。

みんなの「得意」を生かす場！
互いに学べる場を



包括支援

外国人包括支援事業

地域の外国人住民が抱えるたくさんの課題に対して、連携による解決を目指し、シャンティでは法律事務所、社会福祉協議会、外国人支援コーディネーターと共に行行政や地域の支援団体と、外国人住民への包括支援事業を行っています。

多くの外国人の方が暮らす東京都豊島区で2021年5月に始まったこの事業は「としまる (TOSHIMA Multicultural Support)」と名付けられました。2024年3月からは隣の練馬区でも「ねりんく」という支援プラットフォームを立ち上げ、2か所で活動を続けています。多様なアウトリーチと毎月の食料配布・相談会、個別支援などを通じた支援実施に加え、地域の支援力強化を目指しています。

事業のはじまり

居場所づくり事業を通して、東京都豊島区とのつながりを持った私たち。活動を始めたころはコロナ禍の真ただ中であり、地域の外国人住民の皆さんのさまざまな声を聞くようになりました。「職場で真っ先に解雇された」「コロナで帰国もできず、今後の暮らしが見通せない」「在留資格がどうなるか、不安で眠れない」など、聞こえてくるのは多くの苦しい状況です。そんな中、社会福祉協議会が受付を担った生活資金の貸付制度「特例貸付」の申請に外国人住民が殺到しました。社会福祉協議会の窓口には連日、外国人が列をなし、豊島区では全体の約4割が外国人からの申請でした。この状況を何とかしたいという想いを共有する地域の支援者が立ち上がり、シャンティ、社

会福祉協議会、法律事務所による支援ネットワークが結成されました。「コーディネーター」として現場の支援を担うスタッフも新たに加わり、支援の輪はより強固に。ネットワーク結成から約2カ月で、初回の相談会開催にこぎつけ、現在まで続いています。



弁護士法人 東京パブリック法律事務所



支援を受けた人が、次はほかの人を支える「循環」を生み出す。これは「としまる」発足時からのコンセプトです。コロナ禍で仕事を失い在留の危機にあったネパールの料理人は、支援の結果、ネパールの両親に預けていた子と日本で暮らし始めただけでなく、今では、多文化交流のイベントの運営に関わり、地域の方へ料理を振る舞うようになりました。今後、この「循環」は、「ねりんく」という形で区外へも広がっていきます。

そして、この「循環」の渦の中心には、いつもコーディネーターがいました。今後も、コーディネーターを中心に、私たちは「循環」を生み続けます。

豊島区民社会福祉協議会



「としまる」の活動は、多様な団体やメンバー、関係者が得意なこと、できることを持ち寄って、補い合い、高め合うことができるところがとても良いと思っています。私たち豊島区民社会福祉協議会は、在留外国人支援の経験に乏しく、在留資格や就労制限などに詳しい職員が少ないため、「としまる」のメンバーから教えてもらいながら取り組んでいます。また、「としまる」での活動をきっかけに、在留外国人を含む住民や学生と多文化共生をテーマに地域活動を企画したり、職員が支援に関わる研修を積極的に受講するようになったりと、意識や取り組みに変化や広がりが見られていることを実感しています。

練馬区社会福祉協議会



「ねりんく」の良いところは社会福祉協議会（以下、社協）、弁護士、シャンティ、それぞれの強みを結集できるところだと思います。社協の窓口でも外国籍の方からの相談を受けますが、生活上の課題を解決していく上で在留資格が深く関係しているため、その場でどう提案すべきか迷うことが多々あります。弁護士やシャンティ職員と一緒に対応できることは社協職員にとっても安心ですし、なにより相談に来た方が正確な情報を得ることでエンパワメントされる様子にやりがいを感じます。

社協では「やさしい日本語講座」や住民同士の交流会を開催するなど、地域の理解を広げていくための取り組みを始めています。

「としまる」のコーディネーターは、社協さんや弁護士さんたちとチームを組み、さまざまな分野の相談に乗り支援にあたっています。コロナ禍において、夫のDVを理由に家を出てきた母子、異国で一人で子どもを産むことになったママたちとの出会いが多くありました。在留資格、住まい、役所の手続き、子どもの進学、母子の居場所づくりなど、家族に寄り添い、支えるようなサポートも多く手がけてきました。国籍も職業も関係なく、みんなで一緒により良くなるための対策を考え解決を目指します。そんな「としまる」のあたたかい輪の中で、これからもたくさんの奇跡を見ていきたいと思っています！



統括コーディネーター
朴梨沙さん

活動を通じて、困っている人をただ助けるだけでなく、ネパール人コミュニティを支えられることが何よりのやりがいです。普段はネパール人学校で働いていますが、教師としての気付きも得られますし、ほかの支援スタッフとも仲良く、会うたびに自身も周りに相談できる関係がうれしいです。活動を通じて、人とのつながりの大切さに気づきました。まだまだ課題はたくさんありますが、日本人・外国人関係なく、まずはあいさつから始めて、人の輪が広がっていけばいいと思っています。



ネパール支援コーディネーター
メハタ・カル・シンさん

活動の流れ

3 支援力の強化を目指して

地域の支援力を高める取り組みも、シャンティの包括支援の特徴です。地域との連携を深め、支援の輪を広げるとともに、コーディネーターとしてミャンマー・ネパールなどにルーツを持つ支援スタッフが活躍しています。外国人が支援されるだけでなく、支援する側を担えるかたちを目指しています。支援に関わる仲間たちの声をご紹介します！

活動に関わり始め、厳しい生活を送る在日ミャンマー人の状況を知りました。困ったことがあれば、専門家に気軽に相談できるのが、関係者が密接に連携するこの活動の良さです。私たちのサポートがなければ、生まれてくるのが難しかった命もあります。私の2人の子どもは、私の姿を見て支援の仕事に憧れを持つようになりました。息子は弁護士を目指したいと言っています。子どもたちの声援に励まされ、今後も活動を続けていきます。



ミャンマー支援コーディネーター
ピョウ・ティダ・ソーさん

1



森の中にウサギの親子が住んでいました。
ある日、子ウサギは外に遊びに行きたくて
しかたありませんでしたが、母ウサギは
「帰ってくるまで家を出てはだめよ」と言
い、食べ物を探しに出かけました。
しかし、子ウサギは外に出てしまいました。
その様子をウサギ親子の家の近くに住むス
ズメが見ていました。スズメは大喜びで子
ウサギを追いかけて「早く戻りなよ。オオカ
ミに食べられてしまうよ」と言いました。



しかし、子ウサギはスズメの言うことを
聞かずに進み、突然オオカミに出くわし
ました。しかし、子ウサギはその動物が
オオカミだと気づいていません。
オオカミに目的地を聞かれた子ウサギは
「緑の原っぱに遊びにいくんだよ」と答え
ました。するとオオカミは「一緒に行こう。
僕には自分だけの野原があるんだ。緑の
草もニンジンもたくさんあるよ」と言い、
子ウサギは喜んでついていきました。

2



スズメがもう一度飛んできて言いま
した。「これがオオカミだよ。つい
て行くと食べられてしまうよ」。
しかし子ウサギは「僕は行くんだ！
邪魔しないでよ！」と無視しました。
そこでスズメは母ウサギのところに
飛んでいき、子ウサギがオオカミに
ついて行ってしまったことを伝えま
した。

3



5

怖くなった子ウサギは椅子の裏に逃
げ込み、隠れて泣きました。「ああ、
どうして僕はお母さんの言うことを
聞かなかったんだろう！」
その時、外で母ウサギの声が聞こえ、
オオカミがよそ見をしている隙に、
子ウサギは家の外に飛び出しました。
気づいたオオカミも、子ウサギを
追って飛び出しましたが、オオカミ
は自分で掘っていた穴に落ちてしま
いました。

4



オオカミと野原に着いた子ウサギは、
ニンジンを食べたおなかがいっぱい
になりました。
するとオオカミは「僕の家においで
よ」と言いました。
子ウサギがオオカミの家に入ると、
コンロと鍋が目に入りました。子ウ
サギが「何に使うの？」と尋ねると、
オオカミは「この鍋でお前を料理し
て食べるんだ!」と言いました。



6



子ウサギは無事、母ウサギのもとへ
たどりつき、一緒に家に帰りました。
母ウサギは「なぜ言いつけを守らず
に外に出たの?」と子ウサギを叱り
ました。子ウサギは「お母さんごめ
んなさい。これからは必ず言うこと
を聞きます」と謝りました。

ウサギとスズメ

世界の現場から

AIRMAIL

To 日本の皆さん From 活動の現場

このページでは、
アジアの各国で活動する
シャンティの様子や
職員を紹介します。



From Laos ラオス

少数民族児童のラオス語習得をサポートする新しい取り組みが始まりました。学校建設活動と読書推進活動も継続しており、さまざまなアプローチを通じて子どもたちの教育状況の改善を目指す活動を行っています。

◀『おおきなかぶ』福音館書店

From Nepal ネパール

図書館・リソースセンターが完成し、さまざまな研修が始まる中で女性や若者を中心とした多くの地域住民が学びの機会を得ています。例年より激しいモンスーンの影響で、各地で水害が発生し、緊急救援活動を行いました。



From Myanmar ミャンマー

全土で戦闘が続き、深刻なインフレの影響も受けて人々の暮らしは厳しさを増しています。学校が閉鎖している地域など、学習へのアクセスが困難な子どもたちがいます。より良い学習環境や心の支えとなるような支援活動が求められています。



世界の麺

シャンティの活動地にはユニークな麺料理がたくさんあります。お年寄りから子どもたちまで年齢や世代を問わず愛される麺料理を、シャンティの職員がご紹介します。

カンボジアの麺

【ミーカターン】

មីកាតាំង



カンボジア事務所

モン・スレイネットさん

カンボジアのパタンバン事務所、総務・経理を担当しています。

好きな野菜や肉を入れてお好みにかスタマイズできる、幅広の麺
ミーカターンは、さまざまな風味の食材を使った焼きそばの一種で、特にパタンバンで有名な麺料理です。温かいうちに食べるとよりいっそうおいしいです。

麺は米粉を材料につくられた幅広のもので、柔らかさが特徴です。また、肉や菌ごたえのある野菜が入っているため食べ応えがあります。濃厚で香ばしいソースがかかっているのもポイントです。

材料は米粉麺、お好みの肉、卵、カットナーやブロッコリー、ニンジン、キャベツなどお好みの野菜、ニンニクです。カットナーという葉物野菜は日本ではカイランと呼ばれており、歯ごたえがある人気の野菜です。カットナーは1分ほどゆでておきます。米粉麺をゆでて、油とオイスターソースと一緒に炒めておきます。

準備ができたらいよいよ調理です。はじめにニンニクを香りが立つまで炒めたら、肉と砂糖、塩、醤油を加え、さらにしばらく炒めたらゆでたカットナーを入れます。このタイ

ミングで、ほかに野菜を入れても良いですよ。よく混ぜたら、味を見ながらお好みで調味料やコショウを加えます。その後、溶き卵を加えてさらに炒めます。最後に、炒めておいた麺を加えてよく混ぜたらできあがり。

地元の人は、一日中食べられるこの麺が大好きです。私のおすすめのお店は KUCH CHEA Cantonese Fried Noodle Restaurant へ、1食160円ほど食べられますよ。



KUCH CHEA Cantonese Fried Noodle Restaurant 店内

Hot Topics

1 はじめての試み「読書推進活動イベント」

新しい取り組みとして、昨年の対象校5校で、読書推進活動イベントを2024年末に実施しました。イベントの目的は、対象校が1年間の読書推進活動で得た学びを発表することです。各学校の児童たちは、伝統的な歌や踊りを発表したほか、教員は紙芝居と絵本の読み聞かせを行いました。また、会場となった学校の村の人たちが、200人以上の参加者のお昼ご飯を準備してくれました。こういったイベントを通して読書や絵本に触れることの大切さを伝えていくことの重要性について学んだほか、現在進行中の事業でもこの経験を生かしたいと思いました。

2 事業地に到着するまでに7時間

活動地は、ラオス北部のルアンパバーン県内にあるボンサイ郡とムンゴイ郡です。学校までの道は途中からコンクリート舗装がされていないため、雨期などは非常に危険です。最も遠い学校でルアンパバーン市内からだとも途中休憩なしで約7時間かかります。へき地の村では、自給自足に近い生活が営まれています。ルアンパバーン市内とは全く雰囲気が異なります。村の生活はとてものどかで、時間がゆっくり流れているように感じます。

3 水害被災者に緊急物資を配布しました

2024年7月のモンスーンや9月の台風11号(ヤギ)の影響により、ラオス各地で大洪水が発生し大変な年となりました。特に9月の洪水の被害は大きく、シャンティの事務所があるルアンパバーン市においても、メコン川の水位が上昇し、一時は市内の各所において立ち入り規制がかかりました。シャンティはこの水害被害に対し、762世帯(4,148人)に食料と衛生品を含む生活必需品を配布する事業を実施しました。本事業は(特活)ジャパン・プラットフォームの助成によって実施しました。



PROFILE

ラオス事務所
読書推進活動担当職員
ナリー・サヤセン

ルアンパバーン教員養成校を卒業し、孤児・貧困世帯の子どものための学校で英語教員として7年間勤務。2024年にシャンティに入職し、読書推進活動に携わる。人生のモットーは「時間をただ費やすのではなく、その時間に何を費やすか」

クシヨップが計画されています。ここでは、上述したような、読書推進活動の重要性やそれにおける住民の役割について協議するほか、どのように村の教育活動に関わり、教員・教育を支え、子どもたちを育てるかについて考えます。村人が教育の重要性について理解することは、子どもの学びや発展に大きく寄与すると信じています。ラオスのへき地に住む子どもたちが、楽しく学び彼らの能力を最大限発揮できるような環境づくりに尽力していきたいです。

今後の活動として、各村で形成される村落教育開発委員会へのワー

村全体で支える、
子どもたちの教育環境

機会が増加しています。

が読み聞かせのスキルが向上したほか、各学校において読書室の開設が進み、子どもたちの絵本に触れる機会が増加しています。

2024年6月にラオスのへき地の教育指導・学習環境の改善を目的とした3年間の事業が開始しました。この事業では、少数民族児童を対象にラオス語の習得を主な目標としていますが、活動の一環として、読書推進が含まれています。私は、この活動の計画や実施を担当しています。

読書推進活動は、ラオス語の読み書きがまだできない少数民族児童が、楽しくラオス語に触れることができる効果的な活動の一つです。本事業が開始して半年間、私たちは、教員と村長を対象とした読書推進活動の研修と読書室設置のワークショップを実施してきました。現在、教員たちは読み聞かせのスキルが向上した

From Laos
ラオス

ルアンパバーン市内から遠く離れた山岳地で新しい事業を開始したラオス事務所。対象地域は道路が未舗装のため、雨が激しく降ると車で行くことができなくなり、ボートで向かう時もあります。子どもたちに学びを届けようと奮闘する職員の取り組みをお届けします。

Hot Topics

1 竣工式を開催

2024年8月31日、コシ州ダンクタ郡にて1館目の図書館・リソースセンターの竣工式を開催しました。老若男女すべての人が利用できる場所を目指し、図書室のほか、コンピューター室や研修室、児童室、女性室、若者室などが備えられています。地域の多種多様な民族の参加者が集まり、図書館の完成を盛大に祝いました。

2 女性向けの識字研修

さまざまな理由で公教育を受けられなかった女性などを対象に識字研修を実施しています。60日間の研修では読み書き・計算などの基礎的なスキルを学びます。研修を通じ自信を得た女性たちは、小規模ビジネスを通じた生計改善にも興味を持つようになり、女性の活躍が地域の発展につながることを期待されます。

3 土砂崩れの被災者に対する緊急支援

2024年9月末にネパールを襲った豪雨に伴い、活動地のコシ州ダンクタ郡でも土砂崩れが発生しました。これに対しシャンティとREAD Nepalは、自治体、図書館・リソースセンターと連携し、特に被害が大きかった世帯や学校に屋根用資材や蛇簾を配布しました。図書館の若者グループの皆さんも物資配布に協力していただきました。



PROFILE

ネパール事務所
READ Nepal (シャンティのパートナー団体)
のフィールド・コーディネーター
ピナ・ゴル

2006年に半年間ボランティアとしてREAD Nepalの活動に参加。図書館を通じたコミュニティ開発の理念に共感し、2021年よりフィールド・コーディネーターとして勤務。事業地での活動の実施・調整で中心的な役割を果たし、ライフスキル研修の講師も務める。

り組むようになりました。薬物に手を出していた若者が研修をきっかけに家庭での仕事や農作業を手伝うようになり、親との関係が改善したという例もあります。地域の皆さんと直接関わる中で、彼らが変わっていく姿を間近で見られるのは何よりの喜びです。すべての人が学び、力を得られる場をこれからもつくりていきたいと思っています。

地域や家族のために——
変わる若者の姿

若者の間でもさまざまな変化が生まれています。多くの若者が将来の目標を持てるようになり、地域の社会活動にも積極的に取

り組むようになりました。薬物に手を出していた若者が研修をきっかけに家庭での仕事や農作業を手伝うようになり、親との関係が改善したという例もあります。地域の皆さんと直接関わる中で、彼らが変わっていく姿を間近で見られるのは何よりの喜びです。すべての人が学び、力を得られる場をこれからもつくりていきたいと思っています。

中でも力を入れている活動の一つが女性や若者のエンパワメントです。女性の権利やリーダーシップについて学ぶ研修を開催した結果、多くの女性が自信をつけ、職業・技術スキル研修や識字教室に通うようになりました。若者向け研修では目標設定や問題解決、人間関係など10項目のライフスキルを学ぶ研修を行い、139人が参加しました。

From Nepal

ネパール

ネパール事務所ではコミュニティ図書館を通じた教育文化支援活動を行っています。今回はシャンティと共に図書館事業を実施するパートナー団体・READ Nepalのスタッフからお届けします。



図書館を通じた若者・女性のエンパワメント

Hot Topics

1 健康的な生活習慣への関心の高まり

ミャンマーでは情勢による影響もあり、心身の健康問題に悩まされている人々が増えています。こうした中で健康の重要性を認識し、健康改善を図ろうとする人が増えています。最近では、ダイエットミールやデトックスジュース等を使った健康のためのパッケージサービスも生まれていますが、高価なため、多くの人々にはほとんど普及していません。また財政的困難からジム通いなどは難しいですが、ウオーキングなどが流行っています。長期的な視野で健康増進を意識している人が増えています。

2 学校図書館の設置と研修の実施

シャンティが目指す学校図書館についてカウンターパートである教育省にさらなる理解を高めてもらうために、ネビドーの小中一貫学校2校へ図書スペースを設置し図書館研修を実施しました。参加者は、学校図書館の機能と要素、図書館の管理、子ども向けの本の種類、読み聞かせ等について学びました。トレーナーとして自身も関わりました。参加した先生たちからは「図書館について新たな知識や価値観を知ることができ、子どもたちにとっても有意義な場所である」と感想が届けられました。

3 シャンティが出版した絵本が好きな子どもたち

学校図書館を支援した小学校に対してオンラインでモニタリングを実施していますが、子どもたちが好きな絵本について先生たちに質問すると出版絵本がとても人気があると言います。特に小学校低学年の子どもたちが好きなのですが、その理由としては、文字が少なくシンプルで分かりやすい、イラストも気に入っているからとのこと。先生が読み聞かせを積極的に行っていることも影響していると思います。日本やタイからの絵本も当然人気がありますが、ミャンマーの文化や習慣的背景が組み込まれた内容は、子どもたちにとっておなじみの世界に入りやすいのかもしれないと感じています。



From Myanmar

ミャンマー事務所

活動を開始してから10年が経過したミャンマー事務所。依然として国内情勢は不安定ですが、学びの場を届けるため職員一同、奮闘しています。



PROFILE

ミャンマー
ヤンゴン事務所
事業コーディネーター
ルイン・ルインマ

私立幼稚園、他のNGOでの勤務を経て、2019年にシャンティに入職。クーデターによる事務所縮小で一度退職したが、2022年に再入職。人生のモットーは「一人では自分の考えを大切に、人といるときは自分の言葉を大切に」

ミャンマーと日本の専門家が協力して作品が完成します

それぞれ分業して出版に向けて動くのが一般的なミャンマーで、私たちの出版事業は、国内で活躍する作家、イラストレーター、編集者などが委員会として力を合わせて制作する点が大きな特徴です。また、紙芝居制作はミャンマーではなじみが薄く、紙芝居発祥の地である日本の専門家から学んでいます。出版委員会が草稿を作成し、日本の専門家からコメントや提案を受けるといふプロセスはとても重要で、国内のほかの出版社ではできません。初めて紙芝居を目にする子どもも多く、紙芝居を使った読み聞かせにワクワクしています。

今年も出版決定！

ミャンマー生まれの絵本と紙芝居

2014年から行ってきた児童図書出版活動は新型コロナウイルスや政変により中断を余儀なくされましたが、長年培ってきた経験を生かし、ミャンマーの子どもたちに必要である児童書をつくっていくために再開の可能性を探り続けました。そして2023年ついに再開することができました。現在も活動は続けられています。作家、イラストレーター、編集者で構成される児童書出版委員会(CBPC)メンバーとの調整、メンバーによる絵本・紙芝居の原稿作成、専門家によるチェックのための東京への原稿送付、専門家からのコメント、原稿の修正、これらの工程を経た後の編集などを行っています。印刷所から完成した絵本や紙芝居を受け取った後、対象小学校や僧院学校に配布しています。2025年は絵本2タイトル、紙芝居2タイトルの制作を計画しており、出版委員会による第一稿を東京事務所へ送り、専門家からコメントをもらったところです。同委員会と会議で共有した後第2稿の作業に入ります。



理事
直井 里予
国際ファッション専門職大学 専任講師、京
都大学東南アジア地域研究研究所 連携講師

多様な価値観を尊重しながら「共に生き、共に学ぶ」。
シャンティの活動を通し、争いのない穏やかな地域社会の
形成に少しでも貢献できれば幸いです。



理事
村山 博雅
世界仏教徒青年連盟 (WFBY) 会長、
大阪府・洞雲寺 住職

幼少のころよりシャンティの活動に親しんでいましたが、
各仏教青年会にてボランティアを続ける中、国内外にてさ
らに多くのご縁を頂戴してきました。「共に生き、共に学ぶ」
実践をつとめてまいりたいと思います。



理事
山本 英里
シャンティ国際ボランティア会 事務局長

新しい中期計画を役職員共に進めていきます。子どもた
ちに活動を通して夢を届けることを目指します。



監事
中山 雅之
国士館大学大学院グローバルアジア研究科
教授

世界情勢・社会環境が日々変化の中で、限られた資源を
最大限に活用して目的に資する成果を出すことが組織に求
められます。みなさんと共に行動できるのを楽しみにして
います。



監事
野中 茂
公認会計士（野中公認会計士事務所 所長）

世界情勢が緊迫化し先行きの不透明さが増す中、NGOを取り
巻く環境も一層厳しさが増えています。「本の力を、生き
る力に。」の初心を忘れず、「公益」の名に恥じないようコン
プライアンスとガバナンスに気を配ってまいりたいと思い
ます。



理事
伊藤 弘泰
EARTH LABEL llc. CEO、ポケトーク株式
会社 営業顧問、筑波大学 / 岡山大学 非常勤
講師

東日本大震災より地方創生の NPO の設立を経て、シャンテ
ィのような世界で活躍をする団体にやっと出会えることが
できました。世界のすべての子どもたちが本や教育にアク
セスできる環境を微力ながらご支援できればと思います。



理事
佐藤 真美
一般社団法人 Earth Company
日本事務局長

今年度開始する新たな中期計画の推進を通して、シャンテ
ィの新たな挑戦、さらなる成長をできる限り応援したいと
思います！



理事
シュルツ 八坂 由美
国際協力機構 専門家

シャンティの職員やボランティアを経験し、学校を建設す
る機会もいただき、そして今回理事に選出いただきました。
このご縁を大切に、地球人として「共に生き、共に学ぶ」
姿勢を忘れず、少しでもお役に立てれば幸いです。



理事
関根 隆紀
埼玉県・光秀寺 住職

シャンティの活動が一人でも多くの方に届くよう、そして、
一人でも多くの方に知ってもらえるよう、これまでの経験
を生かし、2 期目の理事として引き続き尽力いたします。



理事
東海 泰典
シャンティ東北 代表、
宮城県・松源寺 住職

たくさん現地の活動を見て、その体験を東北の寺院や学生
の方々に伝えていきたい。シャンティの精神が浸透してい
くことを微力ながら進めてまいりたい。



理事・監事が選出されました

2025 年 3 月 27 日 (木) に行った定時社員総会において

役員が選出され、新役員体制となりました。

＊肩書は 2025 年 4 月時点のもの



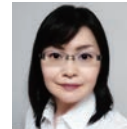
常務理事
松永 寛道
静岡県・宗徳院 住職

目まぐるしく変わる社会情勢の中、国内外の職員・スタッ
フにはいつも多くの情熱をおすそ分けいただき、感謝しか
ありません。シャンティな社会の実現のため、さらに共に
学んでまいります。



常務理事
横山 俊顕
曹洞宗総合研究センター 講師、
福島県・安洞院 住職

「共に生き、共に学ぶ」国内外の活動を通して、シャンティ
設立当初の理念や歩むべき道を切り開いてこられた先人た
ちの想いを、次世代へ継承できるよう精進してまいります。



理事
浅野 幸子
早稲田大学地域社会と危機管理研究所
招聘研究員

先が見通しにくい時代だからこそ、市民主体のボランティア
活動の価値は一層高まっていると感じます。シャンティ
の強みを生かし、海外と国内の課題の共通性も見いだしな
がら共感の力で平和で安心な社会づくりを！



理事
有馬 嗣朗
あんでねっと事務局、
山口県・原江寺 住職

行には願いがなければならない。願いがあるから行ずる。
誰もが願う社会とは。その社会づくりとは。シャンティは
きっとつくります。



会長
若林 恭英
里山教育機構株式会社 代表取締役社長
長野県・安楽寺 東堂

激動する社会の変化に対応し、かつ「共に生き、共に学ぶ」
謙虚な姿勢は、一見泥くさいかもしれないが活動地域との
信頼関係構築へ向けて、これからも堅持してまいります。



副会長
茅野 俊幸
(公財)庭野平和財団 理事、
長野県・瑞松寺 住職

祈りに国境なく、祈りに終わりなく。シャンティの活動を
人々に伝えて、つなぎ、共に現地の活動を支え、さらなる
一步を共につくっていったらと思っています。
理事として一人で行えることには限りがありますが、皆の
知をもって進めば光が差してくる。



副会長
秦 辰也
シーカー・アジア財団 副理事長、
ドゥアン・ブラティブ財団 上席顧問

2025 年に入り、国際情勢はますます不透明になってきてい
ます。こうした時代にこそ、一人ひとりが心の平和を丹念
に築き、シャンティの理念である「共に生き、共に学ぶ」
行動を継続していく必要があると思います。



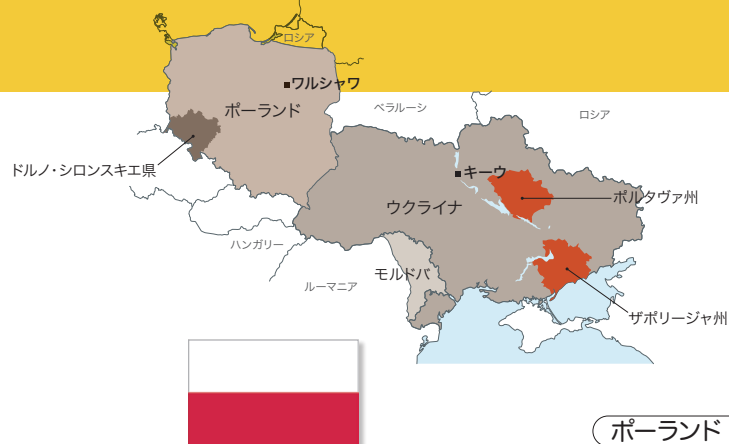
専務理事
岡本 和幸
上総自然学校 代表、
千葉県・真光寺 住職

紛争、災害の多発する現代、市民社会の果たすべき役割は
大きいと思います。しかしその環境はとても厳しい。職員
の安全を第一にしながら現場の人々と共に、職員一丸とな
って NGO の役割を果たしていきたい。



ポーランド事務所
プロジェクト・コーディネーター
グレブ・ミハウフスキさん

リサーチャー(研究員) THE ING
POLISH ART FOUNDATIONでの
コーディネーターを経て現職。



ポーランド

2023年春よりドルノ・シロンスキエ県カミエナゴラ郡にて「ルバフカ社会統合センター」プロジェクトを開始。活動の中心となる建物の改修と地域支援活動を行いました。2023年夏からHouse of Cultureと協力し、子ども向けのワークショップ(絵画、陶芸、マクラメなど)や、ウクライナ人向けのポーランド語教室を開催しました。「小さなイースター」などの季節のイベントも行い、約400人が参加しました。建設はルバフカ町や日本からの専門家の協力のもと2024年夏から開始し、2025年3月に完成しました。現在は、地域の人々に利用されています。



ポーランド語教室の様子



上: 裁縫講座(ウクライナ)

下: ピザ職員講座(ウクライナ)



ウクライナ

中部ポルタヴァ州・南部ザポリージャ州において、現地提携団体「Adult Education Center」との協働を通して、国内避難民の方々向けに食料や生活必需品を配布するほか、成人教育講座として「裁縫講座」「ITスキル講座」「心理学講座」などを開催し、避難先での就職支援・ストレスケアに取り組みました。成人教育講座は2022年から2024年までの間、中部ポルタヴァ州・南部ザポリージャ州で開催し、計73講座、開催時間は延べ4,000時間を超えました。受講者の方からは「2022年4月に避難してからシェルターに閉じこもりがちだったが、講座をきっかけに外に出て人と交流し、戦争が終わった後の自分の将来を考えるきっかけになった」という声が届きました。



上: 日本人職員に代わり覚書を取り交わす
グレブコーディネーター

下: 物資配布の様子(ウクライナ)

ウクライナ危機が始まって以降、シャンティは理事・職員による初動調査を経て、現地提携団体を通じてポーランド・モルドバ・ウクライナでの支援を継続的に実施してきました。2022年にはポーランド・ウクライナに拠点を置き、ポーランド国内に逃れた避難民の方や、ウクライナ国内への輸送を通して約2500人の方に食料・生活必需品・学習用タブレットを配布、モルドバでは避難民の子ども向けに教育施設への学用品の配布などを行いました。

こうした緊急支援のほか、ウクライナ国内では現地提携団体・大学との協働で成人教育講座を開催し、避難先での就職支援とストレスケアに取り組みました。ポーランド政府の支援方針が「時的な保護」から「時的な滞在」に変わり、中長期的な視点の支援が求められる中で、西部ルバフカ町に拠点を置き、「社会統合センター」の開設事業にも取り組みました。シャンティとしては2025年3月末で活動をひと区切りし、今後はモニタリングなどを通してフォローアップを続けます。

ウクライナ危機 事業報告

ミャンマー事務所10周年イベント 学びを届けるための挑戦 ～ NGOの苦悩と模索の10年～

2024年12月6日、ミャンマーでの活動開始から10年がたつにあたり、これまでの活動を振り返るイベントを開催しました。

第1部は、ミャンマーにおけるカリキュラム改訂の技術協力プロジェクトに携わり、プロジェクトの完了後も遠隔で教材開発を実施されていた、株式会社パデコの宮原さんにお話を伺いました。第2部は、ミャンマー事務所のトータ職員とハニー職員から、事務所立ち上げ時からどのように事業を拡大したのか、そして現在の状況やこれからの展望についてお伝えしました。

(内容・肩書きは2024年12月時点)

第1部

ミャンマーの教育の変化とカリキュラム

宮原…2011年の民政移管後、教育改革を実現するために「初等教育カリキュラム改訂プロジェクト(CREATEプロジェクト)」が実施されました。新カリキュラムは、知的・身体的・道徳的・社会的・経済的な力をはぐくみ、新しい時代に必要なスキルを身に付けることを目的に作成されました。それまでほとんど授業が行われていなかった科目も教えることになり、子どもたちが主体的に楽しく学ぶことができるように、また身体的・社会的にあらゆる背景を持つ子どもも勉強できるように工夫しました。また、教員にも大きな変革が求められ、毎年約25万人の教員、教員養成校の学生、行政官に対して、新カリキュラムを紹介する研修を行いました。

ミャンマーの教育はここ10年で大きな変化を遂げており、子どもたちに寄り添い続ける現地の方々と、彼ら・彼女らを支える存在がなければ、ひとつの世代が失われてしまうような危機的な状況です。どのような立場にあっても、未来を生きる子どもたちのためにできることを模索するしかないと思います。

第2部

シャンティのあゆみ、今後への希望

トータ…2014年の活動当初、学校に通えない子どもたちのための特別な場所はほとんどなく、貧しい子どもたちは寺子屋のような場所に頼っていました。山本…そこで長年子どもたちの学びを支えていた僧院学校の校舍建設を行い、これまでに30校を建設しました。

トータ…建設を支援した学校の生徒から「柱と屋根だけの教室で授業を受けていましたが、新校舎のおかげで雨漏りや蚊に刺される心配がなくなり、集中して授業を受けることができます」とメッセージをもらったことがあります。

山本…また、当時ミャンマーには図書館が5万5755館ありましたが、その9割は村やコミュニティによって運営されている図書館で、公共図書館は1割だけでした。学校図書館は全土の学校の半数にしかありませんでした。

ハニー…公共図書館の子ども用スペースは、大人用の読書室の隅に小さな机と椅子がひとつ置かれ、その上に数冊の漫画やコミック本があるだけでした。そこで、公共図書館のスタッフを対象にワー

クシヨップを行い、家具と絵本をそろえました。

しかしスタッフたちは子ども向けのサービスの大切さを理解できず、読み聞かせにもあまり興味を示しませんでした。それでも彼らの反応に氣を落とさず、根気強く進めた結果、少しずつ子どもたちが図書館に来るようになったのです。

山本…その後、図書館活動は対象地域が広がり、公共図書館に加え学校図書館でも活動を開始し、より一層認知されるように

中原所長からのメッセージ

中原…タイ・ミャンマー国境の難民キャンプで教育文化支援活動を開始した時、将来の帰還を見据え、ミャンマー国内での活動を視野に入れていました。そして、2011年の民政移管により、それは実現へと動き出しました。しかし、国内に135もの多民族が存在するミャンマー。それぞれ異なる歴史や文化の中でNGOが活動することは難しく、ミャンマーの平和構築に少しでも力になれるように、学びながら歩んでいくことが重要だと身を引き締めたことを思い出します。

ミャンマーは今厳しい状況下にあり、

なりました。2016年ごろから図書館活動がより広がりましたね。ハニー…2021年の政変後、さまざまな難しさに日々直面していますが、私たちが変えていくという意志を持つことが大切です。少しずつでも前進していく限り、困難は必ず乗り越えられると心から信じています。これからもミャンマーの子どもたちのために、そしてミャンマーが直面する緊急事態に対して活動が続けていきます。

これから今まで以上に困難が待ち受けていると思います。しかし、この10年間でまいた種は消えません。子どもたちにとって学びは生きる力になり、そして生きた力が未来を築くと信じています。教育文化支援を絶対に止めないという現地職員、シャンティの活動に共感し、手を取りあってくださるミャンマー関係者の方と力を合わせて、たくさんの方と咲かせたいと願っています。

ご視聴はこちら



イベントの様子は
YouTubeで
ご覧いただけます

PROFILE



(第1部登壇者)

宮原 光 さん

株式会社パデコ 教育開発部
シニアコンサルタント

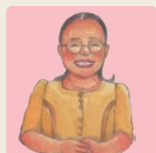
国際NGO ワールド・ビジョン・ジャパンで開発事業に携わったのち、ワールド・ビジョン・インターナショナル・ミャンマーのプログラム・コーディネーターとして駐在。国際協力機構(JICA)人間開発部 教育グループ、JICA パプアニューギニア事務所等での勤務を経て、現職。



(第2部登壇者)

山本 英里

シャンティ国際ボランティア会
事務局長



テツ・テツ・ハニー

シャンティ ミャンマー事務所
シニアコーディネーター



トータ

シャンティ ミャンマー事務所
カウンターパート渉外担当



子どもたちの年齢や文化的背景に応じて必要な絵本は異なり、児童書の書店員、図書館員、出版社から、おすそめを教えてください。それぞれの絵本に込められた想いを紹介します。



絵本に込められた想い 絵本を届ける運動

どうして戦争は
起きたらいけないの？

私たちが過ごす何げない日常がどれほど幸せなものか、考えたことはありませんか？

温かい風呂
おいしいご飯
大切な人たちの笑顔

当たり前のように感じていますが、そのどれもが当たり前ではないのです。せんそうがはじまると。

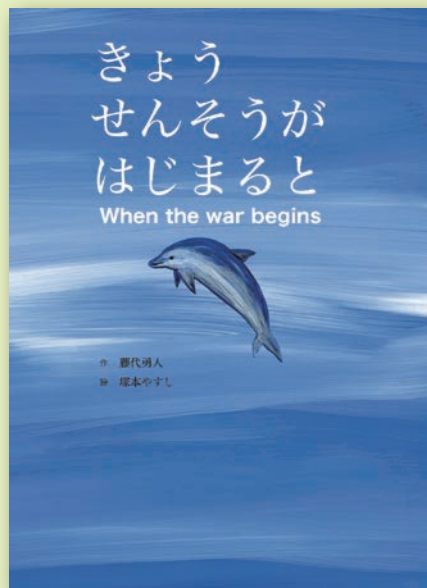
「きょうせんそうがはじまると」この作品は、戦争が始まると私たちの日常にどのような変化があるのかを教えてください。戦争を知らない現代の子どもたち、そして親世代。戦争にはどのような影響があるのか、どのような悲しみが生まれるのか。世界中の人々に伝えていきたいです。

そして、なぜ戦争を始めてはいけないのかを改めて考えてみませんか？



出版社紹介：
野崎智嗣さん
ニコモ

2019年に株式会社光陽社の子会社として設立。2019年5月に絵本通販サイト「YOMO」リリース。『カッパねこ』（塚本 やすし）、『おまめがっこう だいずぐみ』（よこみち けいこ）、『とうちゃんはりょうりにん』（はしもと えつよ）等を刊行。



『きょう せんそうが はじまると』

作：藤代勇人
絵：塚本やすし
出版社：ニコモ

言語・テーマ

戦争と平和をテーマにした絵本として、活動地からの希望があり選書しました。2025年度はビルマ語に翻訳し、ミャンマーの子どもたちに届けます。戦争が始まると日常がどう変わるか、分かりやすく描かれた絵本です。

参加のお申し込みはこちらから



クラフトエイドはアジア各国で民族独自の伝統や技術を生かした商品づくりに取り組んできました。このページでは民族の手仕事とスタッフおすすめの商品を紹介します。

つくり手さんのぬくもり

CRAFT AID



【つくり手さんの紹介】
タイ生産者団体

House of Hope (希望の家)

1997年に創設された児童養護施設『House of Hope (希望の家)』は、親をエイズや麻薬中毒、貧困などで失った山岳少数民族の子どもたちが暮らしています。自立を第一に考え、掃除や洗濯、料理などの家事から家畜の世話や農作業まで、日々の暮らしの中でたくさんの方の学びながら生活しています。ものづくりも学びの一つ。各作業をみんなで分担しながらクラフトエイドの人気商品『ゾウのブックマーク』や『カラフルおばけチャーム』を製作しています。製作費は、施設の運営費や子どもたちのお小遣いとして使われています。また、学校が長期のお休みになる時期、帰る家のない子どもたちにとって、ものづくりに取り組むことがモチベーションを高めたり、良い息抜きになっているそうです。



スタッフの
おすすめ商品

ゾウのブックマーク

ココナッツの殻をカットするのは男の子たち。施設の子どものニックネームをタイ文字で彫るのは女の子たち。ヤスリをかけたり磨いたりするのは低学年の子どもたち。みんなで分担しながら製作しています。



新商品やお買い得情報も更新中。クラフトエイド・オンラインストアはこちらから

シャンティからのお知らせ

人事のお知らせ

●入職

平山 将	国内事業課 国内事業担当	2025年1月14日付
吉田 真実	事業サポート課 海外事業担当	2025年2月1日付
元木 太一	海外緊急人道支援課 海外緊急人道支援担当	2025年3月1日付

●退職

夫津木 廣大	海外緊急人道支援課 チーフ・海外緊急人道支援担当	2024年9月30日付
佐々木 ひろみ	広報リレーションズ課	
支援者サービス兼絵本を届ける運動担当		2024年11月30日付
守屋 流詩亜	アフガニスタン事務所 事業担当	2024年11月30日付
竹内 麻梨耶	海外緊急人道支援課 チーフ	2025年3月23日付

●異動

吉川 剛	経理課 課長補佐 → 経理課 シニアスタッフ	2024年9月1日付
瀧 龍太郎	経理課 チーフ → 経理課 パートタイム職員	2024年9月1日付
吉村 莉恵	海外緊急人道支援課 海外事業担当 → 広報リレーションズ課 広報・支援者サービス担当	2024年11月1日付

●昇格

石塚 咲	国内事業課 課長補佐 → 国内事業課 課長	2024年9月1日付
------	-----------------------	------------

●休職

木下 愛子	広報・リレーションズ課 絵本を届ける運動担当	2025年2月28日付
-------	------------------------	-------------

2024年度の翻訳絵本が活動地へ向け旅立ちました

2024年に「絵本を届ける運動」へのご支援で収集した絵本が2月3日（月）に活動地へ向けて、シャンティ東京事務所を旅立ちました。翻訳絵本づくりに参加された企業や団体の方、曹洞宗総合研修センターの方々がボランティアでお手伝いに来てくださり、職員も含め37名で、2024年の翻訳絵本19,224冊338箱を無事運び出すことができました。2025年は18,137冊を目標にお申し込みを受け付けています。皆さまのご参加をお待ちしています。



シャンティ 2025年6月号(通巻321号) | 2025年6月1日発行

発行人：若林恭英
発行所：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220
WEB：www.sva.or.jp E-Mail：info@sva.or.jp
編集人：鈴木晶子
編集・制作：株式会社文化工房
イラスト：きよはらえみこ
印刷：株式会社サンエー印刷

当会へのご寄付は、所得税、住民税、および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。
©Shanti Volunteer Association.
「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。



川畑 嘉文(フォトジャーナリスト)

Yoshifumi KAWABATA

ニューヨークの雑誌社勤務時代に9.11を経験し、記者職を捨て写真の道に進むことを決意。2002年、会社を退職しタリバン政権崩壊後のアフガニスタンを訪れ取材を行った。2005年フリーランスのフォトジャーナリストとなり、世界中の難民キャンプや貧困地域、自然災害の被災地で取材を行い、雑誌や新聞などに写真と原稿を寄稿している。



ジャララバード市内に設置された中村哲さんの肖像画。日本への友好を示すため？

「アフガニスタン再訪」

約4年前に復権したアフガニスタンのイスラム主義組織タリバンの高官が2月中旬、日本を訪れました。孤立した状況を脱却し、日本からの援助を得るのが主な目的です。

昨年3月、私は19年ぶりに同国を訪れました。行き交う人は多く、街はにぎわいを見せていますが、以前よりも資源ごみを集める子どもや物乞いをする女性が増えた印象です。

東部の都市ジャララバードには、同地で支援を続けてきた中村哲氏の肖像画が飾られていました。偶像崇拜を厳しく禁じる中、異例の対応といえます。感謝の気持ちを示すと同時に、日本からの支援をアピールする狙いもあるでしょう。事実、私が面会した地方行政の高官も日本との友好関係を切望していました。いま、日本の立ち位置が問われています。



赤ちゃんを抱きながら物乞いをする女性。女性の就労は禁止されている。



自動小銃を構え記念写真に応じる若いタリバン兵たち。スマートフォンの影響か、写真への抵抗が少ないタリバンも多かった。